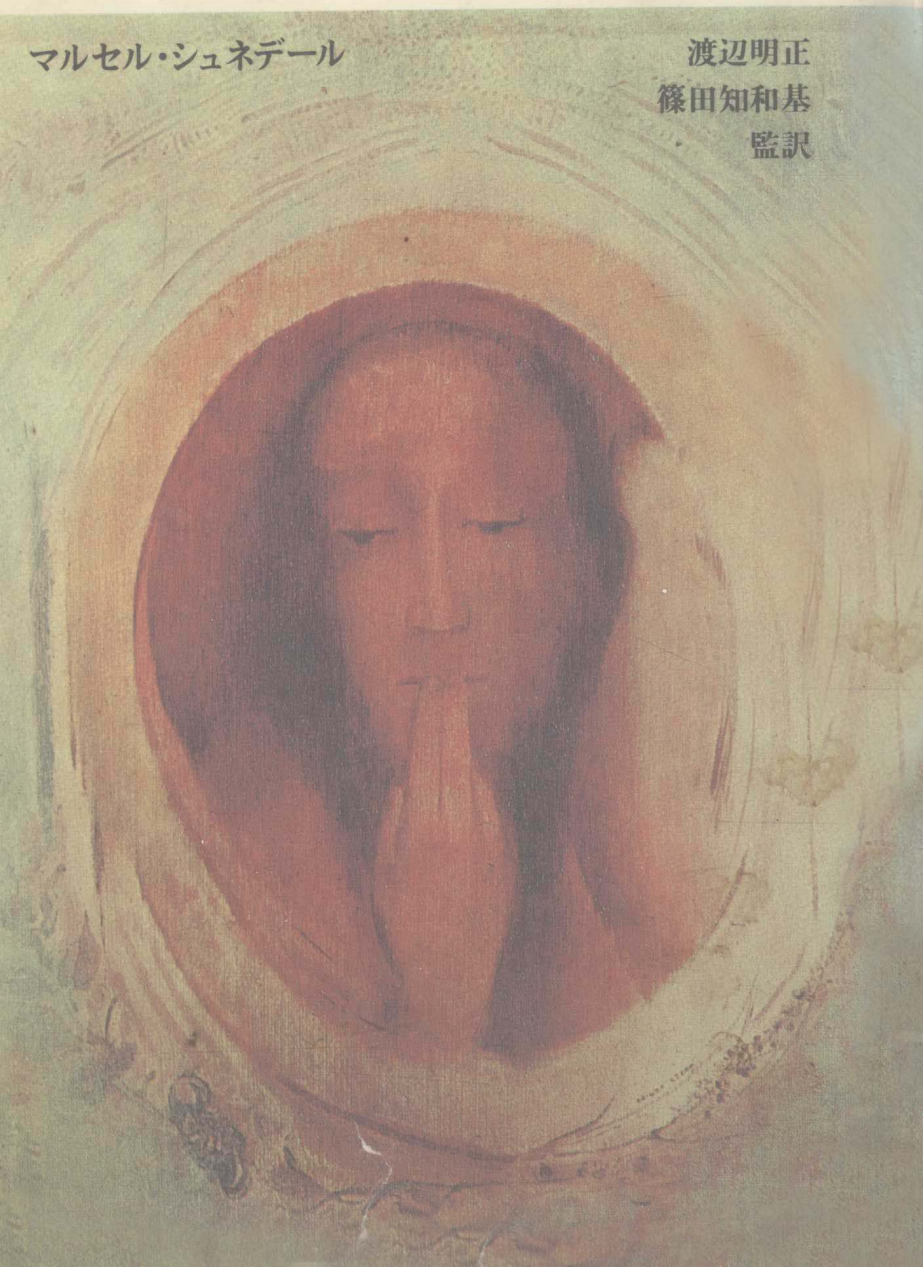
フランス幻想文学史

マルセル・シュネデール

渡辺明正
篠田知和基
監訳



クラテール叢書8

フランス幻想文学史

1987年8月30日初版第1刷発行
訳者代表　渡辺明正
発行者　佐藤今朝夫
発行所　株式会社国書刊行会
東京都豊島区巣鴨3－5－18　郵便番号170
電話03－917－8287　振替東京5－65209
装訂者　中島かほる
印刷所　凸版印刷株式会社　セイユウ写真印刷株式会社
製本所　河上製本株式会社
定価4200円

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

マルセル・シュネデール

フランス幻想文学史

江苏工业学院图书馆
藏书章

渡辺明正　篠田知和基 監訳

国書刊行会

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

目

次

序論 15

第一部――幻想以前

第一章　驚　異（十二―十五世紀） 25

『荷車の騎士』：秩序破壊のはじまり――『アレクサンドル大王物語』：花の姿の乙女たち――マリ・ド・フランスの『短詩』：妖精――『アマダスとイドワーヌ』：憂い顔の美丈夫――『葉蔭の劇』：魔術的な食事――アルチュール王と円卓――トリスタンの秘薬――聖杯伝説――『シビラ女王の楽園』――『危険の泉の書』

第二章　対立世界と並立世界（十六―十七世紀） 66

バロック期の魔法劇――異端審問官たち――シラノ・ベルジュラック：『妖術師に関する書簡』――メリュジーヌ伝説――ロンサール：『魔神讃歌』――モンフォーコン・ド・ヴィラール：『ガバリス伯爵』

第三章　彼岸および無限の空間（十六―十七世紀） 102

空、サン＝タマン：『救われたモーゼ』――地獄、ドービニェ：『悲愴曲』――シゴーニュ――天地の精霊：『緑の夢』――シラノ・ベルジュラック：『別世界』――バロック詩における幽霊と夢：テオフィル・ド・ヴィヨ

第四章　妖　精――121
妖精族の軽やかな血――ドーノワ夫人――ペロー：『鵞鳥おばさんの話』――驚異に対する諷刺：ヴォルテール――『セトス』――『魔笛』――イリュミニスム
第五章　三つの例外的存在――141
ジャック・カゾット：『悪魔の恋』永遠なる救済の危機――ウィリアム・ベックフォード：『ヴァセック』地獄の果ての旅――ヤン・ポトツキ：『サラゴサ手稿』双子座の夢魔たち
第六章　狂熱派――169
イギリス暗黒小説：ウォルポール、ラドクリフ、ルイス――ロバートソンの魔術幻燈――サド侯爵：『小説論』――マチューリン：『メルモス』――バイロンの君臨：さまざまな悪夢、ノディエ：『スマラ』――吸血鬼たち――ジェリコーとドラクロワの絵画――ジュール・ジャナン：『死んだロバとギロチンにかけられた女』――ペトリュス・ボレル：『シャンパヴェール』――ロートレアモン：『マルドロールの歌』
第二部――幻想
第七章　幻　想――203

定義――ノディエ：『文学における幻想について』――このジャンルの創始者：ホフマン――彼の四つの主要テーマ：狂気と悪の力、『悪魔の霊薬』、幻覚とユーモア、『ブランビラ姫』

第八章　ホフマンの名による変奏曲（一八三〇―七〇）――231

ノディエ：『パン屑の妖精』――バルザック：『不老長寿の霊薬』『あら皮』『セラフィタ』――エミール・デシャン：『幻想的現実』――ウジェーヌ・シュー：『パウラ・モンティ』――ジョルジェ・サンド：『田園伝説集』『ローラ』――デュマ：『千一亡霊譚』――エルクマン＝シャトリアン：『ラインの岸辺の物語』『大衆小説集』――バルベ・ドールヴィイ

第九章　ドワイエネの館――284

ネルヴァル：『栄光の手』『東方の旅』『パンドラ』『オーレリア』――ゴーティエ：『幻想作品集』『魔眼』『化身』『スピリット』――『ジゼル』――フィロテ・オネッディ：『火と炎』――フィラレート・シャール『眼蓋のない眼』――アロイジュス・ベルトラン．ドフォントネー．グザヴィエ・フォルヌレ：『草叢のダイヤモンド』

第十章　メリメの多様な顔（一八三五―七〇）――334

コント・ファンタスティック：『煉獄の魂』『イールのヴィーナス』『ロキス』『ジュマーヌ』

第十一章　新たなる仲介者：エドガー・ポー（一八〇九—四九）——353

第十二章　幻想の見直しと修正（一八五六—九六）——365

I．残酷性によるもの：ヴィリエ・ド・リラダン『残酷物語』『新残酷物語』——II．心霊術の立場から：アラン・カルデック、ヴィクトル・ユゴー、カミーユ・フラマリオン、モーリス・メーテルランク——III．狂気による場合：ギイ・ド・モーパッサン『オルラ』

第十三章　象徴派とデカダン派の幻想（一八八四—一九一二）——395

『さかしま』の影響——〈象徴派の幻想〉レミ・ド・グールモン：『魔術物語』——アルフレッド・ジャリ：『超男性』『フォーストロール博士言行録』——セーヌ左岸の三人の骨董屋——アンドレ・ジイド：『ユリアンの旅』——〈デカダン派の幻想〉ジョゼファン・ペラダン：『アンドロギュヌス』『夫の勝利』『倒れた松明』——ジャン・ロラン：『マンドラゴラ』『仮面物語集』『フォカス氏』

第十四章　多種多様な作品群（一八七五—一九二〇）——440

I．アナトール・フランスとエレディアの三人の婿．フランス：『アベイユ姫』レニエ：

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

『碧玉の杖』『不確かな物語』マンドロン：『黒い偶像の女番人』ルイス：『紅殻集』――Ⅱ．アラン・フルニエ：『モーヌの大将』――Ⅲ．右翼と左翼．エルネスト・エロ：『奇談集』レオン・ブロワ：『不快な物語』――オクターヴ・ミルボー：『神経症患者の二十一日間』――Ⅳ．大衆小説と空想未来小説．ポール・フェヴァル：『吸血都市』J・H・ロニー：『クシペユ』ガストン・ルルー：『テオフラスト・ロンゲの二重生活』『血まみれの人形』モーリス・ルナール：『動かない旅』『青禍』――Ⅴ．ギヨーム・アポリネール：『異端教祖株式会社』『虐殺された詩人』レーモン・ルッセル：『ロクス・ソルス』『額に星』

第十五章　文学における悪魔の再登場――488

ベルナノス：『悪魔の陽の下に』『ウィーヌ氏』――マッコルラン：『悪意』『北橋の舞踊会』――ジュリアン・グリーン：『地上の旅人』『夜明け前の出発』『めまい物語』――ゲルドロード：『呪い』

第十六章　シュルレアリスムの幻想――507

アンドレ・ブルトン：『ナジャ』――バンジャマン・ペレ：『サン＝ジェルマン大通り一二五番地』――ロベール・デスノス：『自由か愛か』――ミッシェル・レリス：『基本方位』――アラゴン：『パリの農夫』――ルネ・クレヴェル：『ぼくの肉体とぼく』――ジョルジュ・ランブール：『ヴェネツィアの馬』――ジュリアン・グラック：『アルゴールの城にて』――リーズ・ドアルム：『隣の扉』――アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ：『煉火』――マルセル・ベアリュ：『水蜘蛛』

第十七章　詩的幻想――532
ジュール・シュペルヴィエール：『沖の小娘』――ジャン・ジロドゥ：『間奏曲』――ジャン・コクトー：『天使ウルトビーズ』『円卓の騎士』――アンリ・ミショー：『プリュームという男』『グランド・ガラバーニュの旅』――アンドレ・ドテル：『空想の年代記』『ジュリアン・グレヌビの幻想旅行』――マルセル・ブリオン――フランツ・エレンス――ジャン・ミストレール――マルセル・シュネデール：『石の戦士』『最初の島』――アラン・ロブ＝グリエ：『迷宮の中で』『スナップ・ショット』――ウジェーヌ・イヨネスコ：『戯曲集』――サミュエル・ベケット：『ゴドーを待ちながら』

第十八章　時限爆弾：カフカ――572

第十九章　今日の幻想――579
ノエル・ドゥヴォー：『バルビヨン館』『ムルシアの貴婦人』『不死のとかげ』――G＝O・シャトレイノー：『使者』『果樹園』――J・M・A・バルトー：『安らぎのない町』――ジャック・ステルンベール：『凍れるコント』――アンドレ・アルデレ：『庭の入口』――フレデリック・トリスタン：『名なし男の真摯にして滑稽なる物語』――クリスチャン・シャトリエール：『シモルグ鳥』――クロード・セニョール：『悪魔の福音書』――ジャン＝ル

イ・ブーケ：『炎の顔』――イヴ・レミーとアダ・レミー：『海の兵士たち』――ミシェル・ベルナノス：『怪異の山』――ピエール・クリパリ：『背後の世界』――モーリス・ポンス：『ローザ』『甘にが草』――フランソワ・リヴィエール：『瀆聖』――ロジェ・ヴリニー：『思わぬ事故』――マルグリット・カサン：『傍らの物語』――ピエレット・フルティオー：『女王の変身』――ジャン・トラサール：『取るに足らぬ小川』――ジェラール・マセ：『眠りの森』

結　論――605

訳者後記――613

索　引――i

フランス幻想文学史

序論

フランス人は幻想的な気質を持っていないとさんざん言われてきたが、フランスに文学が存在して以来、この主張を否認する秘かな血脈が絶えず現われていた。私が本書を著わそうと企てたのは、この反論を証明するためである。二十五年前には、こんな試みは無謀、かつ馬鹿げたものにさえ思えた。トーマス・マンのいわゆる、すばらしい収穫をもたらす天才たちは、フランスではモンテーニュ、モリエール、ラシーヌ、ヴォルテール、シャトーブリアンと呼ばれ、ホフマン、ポー、ラヴクラフト、カフカのような、幻想の偉大な仲介者たちはゲルマンやアングロ＝サクソンの世界に属している事実を口実にして、多くの人びとはフランス人の国民性や特徴を示すと見なされている傾向と平行する、いまひとつの傾向がフランスに存在したことを認めるのを拒否していた。

例えば、ピエール＝ジョルジュ・カステックスの重要な著作『ノディエからモーパッサンにいたるフランスのコント・ファンタスティック』が刊行された後、これに同意せざるをえなくなった時でも、それはロマン主義や後期ロマン主義といった限定された時期とか、マイナーな様式と見なされている短篇（コント）や中篇小説（ヌーヴェル）の話である、つまり前世紀の大作家たちがそんな流行を追ったにしても、相変わらず『従妹ベッド』は『セラフィタ』に、『カルメン』は『イールのヴィーナス』に、『脂肪の塊』は『オルラ』に優っていることを彼らは指摘していた。これは誰も否定しえない事実である。だから私は、フランスでは、幻想は文学という船の密航者だと書いたのである。確かに幻想は国民性を具現していないし、非常に広汎な読者の趣味を満足させてもいない。しかし幻想は存在し、どうにかこうにかこの船上に存続することに成功している。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo